御手洗　昭　治

(Part 2)

―幕末の異文化間ミディエーター：ジョセフ・ヒコ(シリーズ2)―

―「安政の日米交渉」「神奈川問題の調停」「横浜支持の外国商人とヒコ」「リンカーンとヒコ」「リンカーンの三分間を振り返る」―

Intercultural Negotiation & Mediation
A Series of Transcultural Mediators: Joseph Heco (Part 2)

―Continued from the Part 1―

Much has been written either about the shipwrecked story of Hikozo during the Tokugawa period or about well chequred career of Joseph Heco as the first Japanese who obtained the U.S. citizenship. However, little attention has been paid to analyze contributions made by Heco as a transcultural mediator across the Pacific ― particularly, as historian James Murdoch once put it, from his official position as interpreter at the United States consulate and from the fact that in those early years he was almost the only Japanese who could communicate and negotiate interculturally in English.

Heco had unsusual opportunities for observing and hearing things from the native perspectives as well as for the foreign, to which he seems to have availed himself with no mean measure of shrewdness.

There were visits to the United States in the 1860s ― during the troublous time off the Civil War. Heco was the only Japanese who had the rare occasion to meet with three U.S. Presidents, including Abraham Lincoln. This article primarily deals with: (1) the road to the Treaty of Amity and Commerce; (2) how the negotiation settlement called "Yohohama issues" went; and (3) Joseph Heco's hidden contributions in the 19th century as a transcultual mediator; and (4) Heco's initial encounter with President Abraham Lincon in association with the author's views on G. Will's "Lincoln at Gettisburs."

「安政の日米交渉」

1858年の天津条約でアヘン輸入が公認された後，上海でも「貿易の安全と居留地保護」が問題となり，外国の軍艦が上海近海を警備していた。アメリカ合衆国の軍艦ミシシッピー号も，このような任務をする機に新任の駐日公使のタウンセンド・ハリスを仕地へ送り届けるという任務を授けられた。一年前の1858年7月23日にミシシピー号は，日本の下田に立ち寄り，英国とフランスの艦隊の情報をハリスに伝えた。その理由は，英国はインドにおいてセポイの反乱を鎮圧。英仏連合艦隊は清国を征服下におき，その勢力を日本にも侵行しようとしていたとしているということであった。ハリスは，この事態を捉えて，折りから難渋をきわめていた日米協約の成立を一挙に成功させる絶好機とみなした。そして，安政五年六月十九日（1858年7月29日）の午後三時，神奈川沖に停泊中の「ポーハタン号」の艦上で条約の調印を行われた。これが「安政の日米条約」（通称「日米修好通商条約」のことである。しかし，交渉が江戸で行われたので別名を「江戸条約」とも称されている。）

ハリスの記録によれば，調印が終了するやいなや「ポーハタン号」の檣頭（しょうとう）に，日米両国の国旗が掲げられた。そして，二十一発の祝砲が「平和外交の勝利」を誇るかのように江戸湾にとどろきわたり，ハリスと二人の日本側代表との間に堅い握手がかわされたと述べられいる。その後の万延元年四月三日（1860年5月22日）にワシントンで批准書の交換が行われた。（尚，この条約は「貿易章七則」から成り立っている。ハリスの草案では，前文と十六ケ条から成り立っていたが，調印文書では前文と十四条で成り立っている。条文は，和文，英文，蘭文の三通りになっており，正本二通と写し二通の合計四通が作成され批准書交換の時には正本の方が取り為された。和文と英文の他に蘭文が加えられた理由には，ペリー提督との時の神奈川条約では，和文と英文との間に意義の相違が有り，後で紛糾呼を見たので有る。したがって外交レベルの異文化コミュニケーションの観点から，そうした場合には蘭文に従うことにしたためと坂田精一も指摘しいる。）

因みに第一回の日米間の通商交渉は，安政四年十二月十一日（1857年1月5日）に蕃書調所の一室で行われた。日本側の出席者は井上清直，岩瀬忠震（ただなり）と若菜三男三郎，書記二名。そしてハリスは礼服を着用し，通弁官のヒュースケンを従えてこの席に臨んだ。交渉は二時間に及んだと記録されている。ハリスは「ハリスの日記」で日本側のごまかし的態度を厳しく非難。冒頭からこうした論争が繰りひろげられた様子を伝えている。幕府は，公使と領事を迎えること，公使の居住場所，貿易その他に関してのハリスの要求をできるだけ狭いオプションにしようとした。「これは幕府の対外的な根本政策で，そうすることによって一応相手国を宥（なだ）めて戦争の回避をはかり，他方国内の条約反対論者の怒りを最小限に食い止めようとするものであった。井上・岩瀬の両全権は，この趣旨にしたがってハリスと

折衝(せっしょう)するように閣老たちから厳命されていたのである」[13]。江戸へ入ってから，計八十七日，交渉を重ねること十四回でハリスはこの日の条約の妥結に成功したのである。幕府は，二ケ月の調印延期をハリスに要請したが，ハリスはこれを承認するかわりに，もしその期間中に英国が軍艦をつらねて渡来し，いかに条約を強要しようとも自分よりも先に調印しないという誓約書を一筆幕府にさせた。これは，ハリスのみならずアメリカ側の希望でもあった。

この条約でハリスは，特に第三条に関しては一歩も譲らなかった。

日本側は，この条約では「下田，箱館の外，次の場所を左の期限より開くべし。

神奈川：午（うま）三月（一八五八年四月）より凡（およそ）十五ケ月の後より。西洋期限千八百五十九年。長崎 ── 同断，新潟 ── 同断，凡二十ケ月後より。西洋紀元千八百六十年一月一日。，兵庫 ── 同断，凡五十六ケ月より。西洋紀元千八百六十三年一月一日……。」という義務を負うこととなる。ハリスは几帳面な人物として知られているが，「ハリスの日記」はなぜか条約調印のあたりで終わっている。このため，安政の日米条約を「ハリス条約」と例える研究家も存在する。

翌年の 1859 年一月，ハリスは日本駐在総領事から合衆国公使に昇格した。条約第一条に示されている外交代表の地位を得るのである。ハリスはその後，二ケ月香港への旅行に出発。そして，ハリスは後にヒコがミディエーターとして活躍する条約を，未(ひつじ)年六月（1859 年の 7 月 4 日）と定め，神奈川開港の構想を練ったのであった。

ハリスは，各国の相対立する外交目的・優位の競争，嫉視，猜疑，憎悪，戦略など，幕末の日本をめぐるあらゆる複雑な国際交渉の裏面にも精通した外交官であったかも知れない[14]。

「神奈川・横浜問題とミディエーターとしてのヒコ」

ジョセフ・ヒコの最初のミディエーター（調停役）としての仕事は，この「神奈川・横浜問題」に関しての交渉の通訳であった。

幕府は 1858 年の安政条約で，神奈川，長崎，新潟，兵庫の開港をハリスに約束した。そして，そのうち神奈川と長崎の二港については 1859 年 7 月 14 日（安政六年六月五日）に開港と決定していた。しかしながら，「神奈川開港」に関しては日米両者間の争点 (issues) でもあった。これは幕府側の要人を悩ませた。「神奈川」とは現在の横浜市神奈川区であり，東海道の宿場町であり幕府としては参勤交代の大名行列のルートでもあり，交通量も多いこともあり問題視していた。しかも，神奈川が外国からの外交官関係者などの居住地区にでもなれば，付則の事態も起こりかねないという理由で神奈川の開港を交渉の際にも避け

るつもりでいた。幕府側は交渉中から，それとなく横浜開港を匂わすマイケル・ブレーカーの説く「危機回避交渉」を試みた。この為，ハリスは「横浜をふくむ神奈川」または「神奈川をふくむ横浜」を開港することで了解済みであった。大老の井伊直弼も，横浜は錨地としては良港であり，神奈川は一湾中の総称だから横浜を開港しても差し支えないという意見であった。問題は，条約文の中には「神奈川」のみ記録されていたのである。

条約には，例えば――「神奈川，午（うま）三月より凡十五ケ月の後より，西洋紀元千八五十九年七月四日。……神奈川港を開く後六ケ月後にして，下田港は鎖すべし。此個条のうちに載たる各地は，亜霊利加人居留を許すべし。……」となっている。

幕府側としては，当然，横浜を含む「神奈川湾一帯」を想定していたに違いない。しかし，ハリスが現地に赴いた際，神奈川が街道筋から離れすぎているという理由で，条文の「神奈川」をたてにとって物言いをつけたのである。ハリスは「神奈川」を八キロも人里から離れた「第二の出島」にはするつもりは全くなかった。結局この神奈川に関する交渉は，日米双方の間で物別れになったままハリスは一路長崎から香港に向かった。幕府はハリスの香港迄の旅行中に，既成事実を作ろうとして横浜村に波止場作りの突貫工事にとりかかったのである。

ヒコは自叙伝にこのこれについて以下のような書き出しで記録を残している。「七月一日。奉行の酒井隠山支守（おきのかみ）が，公使ならびに領事に敬意を表すため来艦した。この機会に合衆国公使は，私が日本生まれであるが，今は帰化してアメリカ市民となっていることを神奈川奉行に通告した。公使は，私をアメリカ人として取り扱うように要請し，奉行は公使の要請を記録した。そしてその時以来，当局者は私をアメリカ人として，待遇したのである」。午後には英国領事のオルコックが外国人居留地に関して訪問したことについいてもヒコは以下のように記している。当時の英米関係が友好的であったことがヒコの記録からも伺えれる。

On July 1st the Governor, Sakai Oki no Kami came on board to pay his respects to the Minister and the Consul. On this occasion the U.S. Minister intimated to the Governor of Kanagawa that though I had been born in Japan, I was now a naturalized citizen of the United States. He requested that I should be treated as an American citizen and the Governor made a note of his request. And ever from that hourto the present I have been treated as such throughout on all occasions by the authorities.

In the afternoon the English Consul-General (Alcock) visited Minister Harris, while Consul Vyse at the same time saw our Consul. They all had a long interview in the cabin, but we did not know what then transpired, although we surmised that the subject

of their deliberation was the selection of sites for the Foreign Settlement of the port.[15]

七月一日。神奈川奉行が領事館の場所の選定の打合せのため，ドール領事に面接した。奉行は，「すでに海岸に領事館用の建物の建築をすませた」と言った。

領事が「それはどこですか」とたずねると，奉行は「横浜(クロス・ビーチ)」ですと答えた。だが領事は，「自分は，条約の条件どおり横浜でなく神奈川に公館を持ちたい。したがってすでに建築ずみの公館を見る気にならない。」と言った。

「領事は奉行に対して，自分に都合のいい領事館の設置場所を選びに行くために，役人を数人差し向けるよう要請した。翌朝，奉行は役人ふたりと通訳を寄こして，領事と同行させた。彼らは九時に上陸し，設置個所を選んで午前十一時半に帰ってきた。選ばれた場所は，船の発着地のすぐそばの本覚寺(ほんがくじ)であった。山の裂け目にある高台の美しい場所にあり，神奈川湾と横浜を見わたすところである。午後，私は横浜側に本艦の士官たちと上陸し，彼等が買物をするのを手伝った。上陸するとまず関税まで行き，そこで，こちらのドルを日本貨幣と交換する」[16]

ハリスは一度約束して決定したことは，そのまま実行するという直情径行(ちょくじょうけいこう)な性格の持ち主であった。ハリス自身，神奈川の繁栄を自らの目で実際に見てきたのでなおさらであった。したがって，ドール領事にも神奈川の本覚寺に住まわせ，自分が公使として江戸に移った後でも，横浜・神奈川問題で幕府を責めてゆずらなかったという。ハリスは当時，日本在住の外交官の中でも首席の地位であったため，他の国も領事館の設置は始めは神奈川であったという。

通商条約評議書にも「合衆国の大統領は，江戸に居留するヂプロマチーキ＝アゲントを任じ，又，此約書に載る，亜霊利加人民貿易のために開きたる日本の各港のうちに居留するコンシュル又はコンシュライル＝アゲント等を任ずべし。其日本に居留するヂプロマチーキ＝アゲント立立にコンシュエル＝ゼネラールは，職務を行う時より，日本国の部内を旅行する免許あるべし」となっており，ヂプロマチーキ＝アゲントに昇格したハリスには，各国の領事も一目おいていたのである。

「横浜支持の外国商人とヒコ」

各国の領事たちは神奈川支持であったが，外国商人達は神奈川にはあくまで反対であた。反対の第一の理由は，神奈川が海が浅く横浜の方が海運や貿易の上においても数段優れた港になる可能性を持っていたこと。第二の理由には，外国商人達は当時ますます盛んになる攘夷の気風を恐れ，なるべく素性の知れない日本人か頻繁に往来する街道筋を恐れ嫌っていたことである。幕府側も先にも触れたように，一方ではハリスに対し諒解工作を続け

るとともに，他方では横浜港の建設を推し進め街づくりにも力を注いだ。そして，大いに外国商人の便宜をはかったのである。彼等は一人も国際ビジネスの利潤の観点からも神奈川を好まなかった。建前的には外国商人達も条約の文面とハリスに対する気兼ねから神奈川に居館を置いていたものの，実際にはハリスの説得をしりぞけ横浜に集中した。

ある日，ドール領事は，神奈川奉行である堀織部正(ほりおりべのしょう)と非公式な会談を行った。その時の通訳兼ミディエーターはヒコであった。

堀:「私は，神奈川街道筋であり，その結果無法者たちの襲撃から外国人を保護するのがだというのが，神奈川に反対する唯一の理由です。何しろあの連中と来たら外国人が入国するのに大反対で，体を張ってでも，外国人に傷害を与えようとするにきまっていますから。その上あそこは海が浅いので海運には不便ですよ。」

ドール:「一八五八年の条約には，神奈川を外国人居留地とすべしと明記され，横浜につおいては何もふれていないのを奉行も御承知のはずだが」

このように，ドール領事もあくまで始めは神奈川支持を表明していた。しかし，オルシュとかジャーナリストのジャーデイーン・マデイソンなどの外国の商社までもが，横浜の海岸通りの土地を購入し，積極的に横浜をビジネスの中心とする動きを見せはじめた。「壊往事談」には，横浜が実際には商業活動の中心地になった後でも幕府は外国とも，「横浜奉行をはよばず神奈川奉行とよび，横浜の税関を神奈川海運上所と唱えしめすでに往復の書簡にも神奈川横浜としたため，あたかも江戸日本橋というがごとき例を用い，幕府滅亡の夕べまで改めさりしは，条約違反の議をおもんばかりたがゆえ」と記されている。

「リンカーンとヒコ」

ジョセフ・ヒコは，江戸時代の天保八年(1837 年)兵庫県加古郡の古宮に生まれ，幼名を彦太郎といった。日本で最初の「海外新聞」発行したヒコは，十三才の時に遠州灘で暴風雨のため漂流し，アメリカ船に救われアメリカに渡った。ヒコは当時，幕府が禁教してから十八才の時に洗礼を受けクリスチャンネームである「ジョセフ」を授かった。またヒコは，日本からアメリカへの第一号として米国市民権を得た人物である。その後，米国領事のハリスとともに安政六年に日本へ帰国した。神奈川の米国領事館の通訳として安政の修好条約に貢献した。幕末時代の外交舞台におけるヒコの貢献度は，通訳の粋を越えたミディエーターと呼べるものであった。

ヒコはアジアに関心のあった実業家に引き取られ，ピアース大統領，ブキャナン大統領に引き合わされる。1862 年に一時帰国した際，ヒコはリンカーン大統領とも会見する機会に恵まれる。これら三名の大統領の中で，ヒコが最も影響を受けることになる人物といえ

ば，リンカーンであった。ヒコはリンカーン大統領と握手した唯一の日本人である。ヒコはリンカーン大統領直伝の民主主義を，木戸準一郎や伊藤博文に伝えたパイオニアでもあった。

「リンカーン大統領との会見」

ヒコとリンカーン大統領の会見は，どのようなものであたのであろうか。又，維新の志士達に民主政治などをいかに伝えたのであろうか。以下では，役職の身分こそは下級であったが，一人にして二つの国の外交官として生き，新しい時代へのミディエーター役を担わされたヒコについて，当時の彦蔵の英文日誌等を基に探ってみたい。そして，ヒコにも影響を与えたリンカーンに関しての著書「リンカーンの三分間」の書評も加えてみることとする。

ジョセフ・ヒコは1853年8月にピアース大統領と会見の機会を得て，上院議員の秘書を務めた。米領事官通訳として帰国した際，アメリカへ帰化した日系米国人第一号となったジョセフ・ヒコは，再渡米し1862年3月にリンカーン大統領(ヒコはレンコロンと発音していた。)にも会見する。上記三名の大統領の中でヒコに最も印象を与えたのは，民主主義を体現した人物として尊敬されていたリンカーン大統領であった。

ヒコは一時帰国を試みるが，十三歳から二十一歳までの期間アメリカに滞在したことになる。年数にすれば約九年である。心理学者のエリクソンのダイアグラムを参照しても青年期という人格形成において最も重要で感受性の強い時期をアメリカで過ごしたことになる。さらにヒコを取り巻く当時のアメリカは，1850年制定された「逃亡奴隷取締法」によって象徴されるように，北部と南部の感情の対立は日一日とその深さを増し，1861年リンカーン大統領の「不満をいだく同胞の諸君，内乱という重要な問題は，諸君の手中にあるのである……。」と言う警告もむなしく「南北戦争」に突入する時期であった。別の角度から歴史を紐とけば，この時代はアメリカの産業の重点が農業から商業へと移行するターニング・ポイントの時代であった。

以下に紹介するヒコのリンカーンとの会見は，第三者的にみれば一見あっけなく終わった用であるが，当人のヒコにとってはドラマテイックなものであり民主政治を「人民の，人民による，人民のための政治」という言葉で表したリンカーン直伝の民主主義は，維新の志々の木戸孝充や伊藤博文はじめ他の井上薫や渋沢栄一などにも影響を与えるのであった。

ヒコの会ったリンカーン大統領は，当時五十三歳で長身で痩型だが，手は大きく髪は黒く銀髪がまじり，頬ヒゲをのばし黒のフロックを着て威あって，猛(たけ)からずとでもいう

べきであろうか。最も誠実な人と言われ一度会ったものは永く仰慕(ぎょうぼ)し，人から尊敬されていると記している。

リンカーンとの出会いは，ヒコが3月12日にW. H. シュワード国務長官に自分が任官させてもらったことに感謝の御礼の為，ワシントンにシュワードを訪問したことがきっかけとなった。ヒコはシュワード国務長官をシワードと記している。因みに，シュワード長官は，元弁護士でありニューヨーク知事から上院議員になった人物である。1861年リンカーン大統領のもとで国務長官に就任。南北戦争は，リンカーンとシュワードのコンビによって遂行されたのである。1865年4月にリンカーン大統領が暗殺された後も，シュワード長官は，現職のまま十七代目のジョンソン大統領のもとで長官として，南北戦争後の対ロシア（アラスカ購入）を含む外交処理で腕前をふるったのである。

シュワード長官は「われらの偉大なる人物」に会わないで行く手はないと言って，ヒコを大統領室に案内した。ヒコは「リンカーンは肘掛け椅子に腰をかけてはいたが，くびすを重ねた両足を前の台に乗せ，眼鏡を額までずりあげていた。彼はすぐ近くにすわっている一人の陸軍将校の話をじっと聞いていた」と大統領室へ入室直後の印象を自伝で述べている。やがてリンカーン大統領は，腰を上げてヒコとシュワード長官のほうへやってきたので彦達も立ち上がった。そして，大統領は「シュワード君，こんにちわ」と言った。長官が「私の友人で日本人のヒコを紹介したいと思いますが」と言うと，大統領は大きい手を差しのべて「日本のような遠いところからよく来てくれましたね」と言った。ヒコは「彼(大統領)は，私と，まごころのこもった握手をかわし，それからアメリカでの私の境遇について，数多くのことを尋ねた。私達がしゃべっているうちに，財務長官(チェイス氏)が入ってきた。そこで私は，大統領にどうも任官ありがとうございますとお礼を述べ，急いでいとまごいをした。ほかのひとびとにも別れを告げ，どうぞご無事でというあいさつを受けて退出した」と，リンカーン大統領との感激の会見シーンを「自伝」に記述している[17]。

1865年4月に，リンカーン大統領がワシントンのフォード劇場で芝居見物中に暗殺され長官のシュワードも襲撃された時，日本に帰国していたヒコは，ただちにシュワードで見舞状を出し，リンカーンの遺族にお悔やみの文章を送ったのである。そして，このショッキングなニュースをヒコは，「海外新聞」に「同十四日（日本の三月十九日）のよる北部大所領レンコロン，ワシントンの芝居を見に行きしに十一時ともおぼしきころ忽一人の狼籍ものありて偽りいふには大将軍グラントより書面を持来りしとて，俄敷にかけ上り，大所領のうしろより袖銃を以で一発に打倒し剣を抜て舞台の上へ飛び下り剣を揮廻しつす，裏口より逃げ去りける……。」と暗殺事件を伝えている[18]。ヒコは本人が尊敬するリンカーン大統領との会見の模様を，英語で次の様に記録している。

"To-day is Cabinet meeting-day, but I cannot let you go away without seeing our great and good man (sic. said Mr. Seward)."

We entered the President's office and found him seated in an arm chair titled back on to its two hind legs, with his ancles crossed over each on the desk in front him and his spectacles up on his forehead. He was listening patiently to an army officer who sat near by with losts of documents in his hands and lots more on the corner of the desk beside him. As we entered the President glanced at us, and Mr. Seward pointed me to a chair and told me to be seated. He himself went and picked up a newspaper off a table, sat down on the sofa near by and began to read.

I looked around the room and listened to the officer talking to the President.....

After the man disappeared the President got up and walked towards us, and we rose from our seats.

"How do you do, Seward?" he said, and he shook hands with that gentleman.

Mr. Seward then said:

"Allow me to introduce my young friend, Mr. Heco, a Japanese gentleman."

The President stretched out a huge hand, saying he was glad to meet one coming from such a far-off place as Japan. He shook hands with me very cordially, and then he made a great many inquires about the position of affairs in our country.

Whilst we were talking the Secretary of the Treasury (Mr. Chase) came in, and then the Secretary of the Navy. So I made a move to take my leave by thanking the President for the appointment. I bade all of them good-bye and received their good wishes, and came away.

The President was tall, lean, with large hands, darkish hair streaked with grey, slight side-whiskers and clearn shaved about the month. He was dressed in a black front coat. It was said that he was a most sincere and kind person, greatly beloved by all those who came in contact with him, and more especially by his party and his friends.

「人民の，人民による，人民のための政治」という有名な言葉で表したリンカーン直伝の民主主義をヒコは，明治維新の先覚者と云われた木戸準一郎（桂小五郎）や伊藤博文に長崎で伝えた。ヒコは長年通訳として務めた米国領事館辞任後，長崎に移ったのである。

1867年6月，長崎のグラバー商会に関係しているヒコの事務所にある日，木戸と伊藤が訪問した。二人は，身の安全をはかって薩摩のと名乗って訪問したのである。しかも，こ

の二人は挨拶もそこそこに，英米の歴史，制度，政治について質問を始めたのである。

June. One morning this month two officers called at my house. They gave their-names as Kido Junichiro and Ito* shunsuke and said they were officials from Satsuma. I received them as such, and they at once fell to asking me questions about foreign matters ── more especially about the history of England and America, their institutions, Governments and so forth. I answered their quiries to the best of my ability. The elder (Kido) expressed himself as very much interested in the Constitution of the United States ── he said it was quite new to him.

As I replied to all their questions with the utmost frankness, they seemed to be very pleased and became very friendly; yet I noticed that they were not at all inclined to be communicative about themselves.(19)

そして，ヒコからアメリカの民主政治の機構を聞いた二人は「合衆国の政治ちゃあ，そげんなもんですか。珍しいもんですな。こげんな制度は，夢いも見たことごわはん」と薩摩弁で，驚異の目を見張った。ジョージ・ワシントンが国王になってほしいと懇願されたのを断った話や，大統領の任期が四年であることなど維新当時，王政復古を唱した志士達にとっては，ヒコの話は夢のまた夢のようであった。

木戸達が第二日にヒコを訪問した時，二人を昼食に招待した。そして二人にむかって「お二人のお話ぶりからは，薩摩らしいところはまったく感じられません。むしろ瀬戸内海あたりの方言をお使いになっているようだが……。あなたはカツラさんでしょう」と質し，長州人であることを白状した木戸は，身分を明らかにした。かくして木戸は，「人民ありての政府」という民主主義に基づく政治を樹立しようとした人物である。木戸は，また明治の要人で最初に新聞に手をつけた人物でり「新聞雑誌」を創刊させた人物である。木戸に新聞への関心を持たせたのはヒコである。木戸は，当時ヨーロッパ滞在中の友人であった品川弥二郎に送った書簡に「人民ありての政府」について次のように述べている。「皇国開化の進歩もなかなかその運び六か敷く，十に二－三も思ふごとくにまいり申さず。世間の人民は差しおき，官省中にても七－八歩は，機嫌をとり誘導仕らずては諸事合点に入り申さず。皆，政府あっての人民の心得にて，人民ありての政府たるを悟らず，欺息至極に御座候」と伝えている(20)。

「リンカーンの三分間を振り返る」

ゲリー・ウイルズ著の「リンカーンの三分間」は，1270語たらずのゲデイスバーグ演説がもたらした後世への影響と歴史的意義を念頭において書かれた大作である。1993にはピ

ユーリッツアー賞を授賞している。「人民の，人民による，人民のための政治」の一節は，民主主義の理想を明確に表現したものであるが，この一節からはギリシャ修辞学にも影響された「政治言語文化」のアメリカがうかがえ，歴代アメリカ大統領のスピーチを通して国民を説得するという「スピーチ文化」へと受け継がれているようである。ただし筆者が近年行った調査では，このリンカーンの「人民の，人民による，人民のための政治」の一節は，パーカー牧師の一節が基になっている(21)。

本書は五章から構成されており，リンカーンについて書かれた多くの書物と違う点は，「ゲデイスバーグ演説は，自然に湧き出た文であろう」と言われてきた通説を覆すべき分析方法である。第二章においても，ゲデイスバーグ演説が非常に多くの聖書を含む出典を駆使し言語の力を引き出している様子が語られている。第三，第四章では，リンカーンがいかにして南北の政治状況を見定め奴隷の段階的解放をビジョン化し，かつ憲法に照らし国家分裂を防ごうとしたかについて語られている。リンカーンがアメリカという国家が，法的に連邦を維持する唯一のよりどころでは「独立宣言」の中にあると見ていたことが如実に伝わってくる。第五章では，リンカーン自ら熱心にシェイクスピアをはじめ，他の人々の演説を参照し雄弁術を研究していたかが記述され，著者の意気込みが感じられる。

本書は，出版当初よりこの種の書としては，数年を経た現在でも異例のベストセラーを続けているという。なぜであろうか。リンカーンの死後，アメリカ人は彼の謙虚さ国家への献身さ，ユーモア，心の広さより理想的大統領をつくり上げる努力を行ってきた。しかしながら，今アメリカの政治文化は，第二のリンカーンの到来を期待する状態下にある。この現象を我々日本人は他人事として片付けられるであろうか。一読に価する書である。

The power of words, in view of communication in human terms, is more reflected than in the Lincoln's Gettysburg Address, which begins with "Fourscore and seven years ago our fathers brought forth upon this continent a new nation, conceived in liberty and dedicated to the proposition that all men are created equal."

Rather than delivering a lengty address, Lincoln gave the whole nation "a new birth of freedom" in the space of a mere two hundred and seventy two words. Lincoln's oratory strategy, according to my research, was by and large influenced by T. Parker's work. Willi's work reveals under what circumstances Lincoln, as President of the United States during the civil war, came to transform the world and to effect an intellectual revolution, how Lincoln's words completed the work of the guns, how he wove a spell which has not yet broken, and moreover, how we ought to creat a new cultural framework in the comtemporary American politics. The same notion can be

applied to today's Japanese political culture.

注

1. 御手洗昭治（1996）新国際人論：トランス・カルチュラル・ミディエーター時代への挑戦」（総合法令，pp.2-3）.
2. 春名　徹（1979）「日本音吉漂流記」（晶文社，第一章）.
3. 同上
4. 中川　努（1985）「日系第一号」（社会思想社　p.46）.
5. モチズキ・マイケル「日米摩擦を考える」（日本経済新聞，1995年6月9日）& Asia Perspectives (The Mansfield Center for Pacicific Affairs, Vol.1・Issue 2, Dec. '98).
6. Heco, Joseph (1895). "The Narrative of A Japanese Vol.I & II" (Edit.) with J. Murdoch. (Yokohama: Printing & Pub. Cp., Vol. & San Francisco: Calif.: American ―― Japanese Pub. Co., p. 201).
7. Alcock, Rutherford (1863). The Capital of the Tycoon Vol.I & II"(London: Longman, Green, Longman, Roberts & Grn.) &近盛晴嘉（1974）「ジョセフ・ヒコ」吉川弘文館，pp.45-47).
8. Heco.前掲書　pp.3-29.
9. 同上　pp.4-5.
10. 近盛，前掲書　p.102.
11. Satow, Ernest (1921). "A Diplomat in Japan" (Philadelphia: J.B. Lippincott Co.).サトウ，アーネスト（1960）「一外交官の見た日本」（岩波出版，第二章）& 中川　努／山口　修（1971）「アメリカ彦蔵自伝一・二巻」（平凡社，p.108).
12. Satow，前掲書，p.272.
13. 坂田精一（1973）「ハリス」（吉川弘文館　pp.151-152).
14. 同上　p.248.
15. Heco，前掲書，p.201.
16. 中川　努・山口　修，前掲書，pp.172-173.
17. 同上　pp.269-273.
18. 「海外新聞」（1868）アメリカ国の部
19. Heco，前掲書，p.90.
20. 近盛　前掲書，p.90.
21. Wills, Garry (1995). "*Lincoln at Gettysburg*" (Literary Research, Inc.) on Prologue I through 4.

参考文献

荒　正人（1974）漱石文学全集」[別巻]（集英社).

Blaker, Michael (1977). "Japan's International Negotiationg Behavior" (N. Y.: Columbia Univ. Press).

近盛晴嘉（1974）「ジョセフ＝ヒコ」（吉川弘文館).

Cosenza, Mario E (1959). "*The Complete Journal of Townsend Harris*" (Rutland: Tuttle.

Crow, Carl (1939). "*Harris of Japan*" (Hamish Hamilton).

Heco, Joseph (1895). "*The Narrative of A Japanese Vol.1 & II*" edited with J. Murdoch. (Yokohama: Printing & Pub., Cp., Vol.I & San Francisco: Calif.: American Japanese Pub., Co.. 1895) and 「漂流記：(上・下巻)」(下巻 1895 年 5 月一日発刊).

Mardoch, James (1926). "*A History of Japan*" (London/Kegan Paul Trench Trubner & Co. Ltd.).

御手洗昭治 (1995)「リンカーンの三分間」(潮出版「Ushio Library 書評」).

中川　努 (1985)「日系米人第一号」(社会思想社).

中川　努／山口　修 (1971).「アメリカ彦蔵自伝 (一・二巻)」(平凡社).

夏目漱石「博士問題とマードック先生と余 (上・中・下)」(1911) 東京朝日新聞 3／6-9)「マードック先生の日本史 (上・下)」(1911) (東京朝日新聞 3／18-19).

Reischauer, Edwin. O (1970). "*The Story of a Nation*" (N. Y.: Knopf).

坂田精一 (1973)「ハリス」(吉川弘文館).

Satow, Ernest (1921). "*A Diplomat in Japan*" (Philadelphia: J, B. Lippincott Co).

Wills, Garry (1992). "*Lincoln at Gettysburg*" (Literary Research, Inc.,).

── 今回の二編から成る小稿は，筆者がこれまでに日本交渉学会に於て口頭発表したものに加筆し，まとめ上げた研究覚書である。また本稿は，1998 年の札幌大学「経営と経済」29 巻第 2 号「異文化交渉とミディエーション：カーター大統領のデイトン和平交渉への調停工作」に続き，平成 10 年度の札幌大学研究助成の基で，外国語学部の濱田英人助教授と行なった共同研究成果の一部でもある。──